

佐々木 隆

二〇一〇年八月に *Oxford Dictionary of English* (Oxford: OUP)の第三版が出版された。この中で新しく英語になった日本語がある。それが Hikikomori である。定義は次の通りである。

(in Japan) the abnormal avoidance of social contact, typically by adolescent males. ■ a person who avoids social contact.

—ORIGIN Japanese, literally 'staying indoors, (social) withdrawal.'(p.828)

ここで注目しておきたいのは、typically by adolescent males というところだ。日本では一般に「ひきこもり」(引籠り)はどのように定義されている

のだろうか。『広辞苑』(第六版)を見てみよう。

五

自宅や自室に長期間とじこもり、他人や社会と接触しないで生活する状態。一九九〇年代に青少年の間で増加し社会問題化。(二三四二頁)

『広辞苑』には男女については記載されていない。

「青少年」という表現はやや男性的な表現ともいえるが。『広辞苑』では「青年と少年。こどもとおとなの中間の若い人たち」(一五四三頁)と定義されている。いづれにしてもはっきりと男性という表現をしていないまでも、女性を意識させる言葉も出てきていない。これにはこれにはもうひとつのキーワード「オタク」(otaku)との関連が見てとれよう。「オタク」の定義には男女に関する表現はない。『電車男』(二〇〇四)の印象も否定することはできないだろう。ここで厚生労働省が「ひきこもりの評価・支援に関

するガイドラン」(平成十九年度)の中で定義した「ひきこもり」とは次の通りである。

様々な要因の結果として社会的参加(義務教育含む就学、非常勤職を含む就労、家庭外での交遊など)を回避し、原則的には6ヶ月以上にわたって概ね家庭にとどまり続けている状態(他者と交わらない形での外出をしてもよい)を指す現象概念である。なお、ひきこもりは原則として統合失調症の陽性あるいは陰性症状に基づくひきこもり状態とは一線を画した非精神病性の現象とするが、実際には確定診断がなされる前の統合失調症が含まれている可能性を低くないことに留意すべきである。」(六頁)

ここには男女のことを記載されていない。しかし、おそらくこのひきこもりを世間的にもブレイクさせ

たのは、一九八八年〜一九八九年に起こった宮崎勤の幼女誘拐殺人事件ではなかっただろうか。この頃はオタクと言う言葉も流行り始めていた頃で、宮崎勤の部屋に積まれていたビデオテープ(約六〇〇〇本)の光景はあまりにもショッキングだったかもしれない。こうした「オタク」ひきこもり」といった著しくネガティブな方程式が世間的に出来上がってしまった感がある。このイメージがあまりにも鮮烈であったため、欧米でもこの事件の報道では *hikikomori* という言葉が一過性的に用いられたことがあった。欧米では児童福祉に関する考え方が日本とは比較にならないほど厳しいものがある。これを考えると、宮崎事件の影響がこの *hikikomori* の定義に大きな影響を与えたとしても不思議ではない。

ひきこもりは「家庭にとどまり続けている状態(他者と交わらない形での外出をしてもよい)を指す現象概念」とあるが、一九九〇年代以降はイ

インターネット時代であり、必ずしも対面を必要としないコミュニケーション・ツールが格段に発達したことも大きな要因であることは誰も否定できないだろう。しかし、ジェンダーにはかなりこだわりのある海外では、いつになったら、定義から「男」がはずされるのが気がかりだ。